

2023. 1. 15 (日) 説教者：河野晃宣教師

聖書箇所：創世12:10-13:4 説教題：「以前に築いた祭壇の場所へ」

創世記12章1節から3節の個所でアブラムは神様に召し出され、信仰によって約束の地に向かって出発した。しかし、10節で約束の地カナンでアブラムは飢饉を経験した。アブラムは飢饉から逃れるためにエジプトに下っていくことを決断する。

11-13節、エジプトとの国境まで来て、アブラムは自分の身を守るために人間的な策略に打って出る。自分の妻のサライを自分の妹だと嘘をついた。14-16節、その策略は裏目に出て思わぬ方向に展開していく。アブラムとサライに重大な二つの危機が迫っていた。一つは、サライがファラオの妻にされたこと。アブラムは、妻のサライに姦淫の罪を犯させ、夫婦関係を自ら壊そうとしてしまっていた。二つ目は、神様がアブラムに与えてくださった祝福の約束が成就することを妨げてようとしていたということ。神様は、創世記12章7節で「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」と約束している。これは、二人から生まれる子ども、その子孫が全世界に祝福をもたらす者となることによって成就していくものであった。アブラムはそれを自ら妨げようとしてしまっていた。しかし、17節で主は、その状況に介入され、暴走したアブラムにブレーキをかけられた。

18-19節で、ファラオは災いの原因がアブラムとサライにあることが分かり、彼ら呼び出して問い詰めた。信仰を持たないエジプト人の前で、神の民である二人が過ちを認めさせられた。二人は大きな辱めを経験することとなった。しかし、このアブラムが起こした事件で最も辱められたのはアブラム夫妻ではなく主ご自身であった。旧約聖書を見るとイスラエルの歩み全体が主が受けたはずかしめの歴史であったことが分かる。その頂点はバビロン捕囚。新約に目を向ければ、主の受けたはずかしめの頂点は主イエスの十字架であった。人の罪ゆえに神の御子が処刑され、はずかしめられを受けた。しかし、このはずかしめによって救いの契約が最終的に成就し、罪人が救われる道が開かれた。ここからいかに主の約束がいかに堅く、真実なものかが分かる。

20節、ファラオは、すでに贈った贈り物をそのまま与えて彼らを送り出した。これは神様の憐れみ、守りであった。主は、私たちの弱さと失敗を越えて働かれるお方。主は、私たちの失敗の中に介入され、最善に導き、ご自身の計画を成し遂げてくださる。困難な中であっても、私たちは真実な主に信頼したい。

そして、主を信じて歩む私たちは、いつでも主のもとに帰ることがゆるされている。創世記13:3で、アブラムは再び「ベテルとアイの間にある、最初に天幕を張った場所まで来た。」そして、13:4節で「そこは、彼が以前に築いた祭壇の場所であった。アブラムはそこで主の御名を呼び求めた。」私たちキリスト者は、アブラムのように以前に築いた祭壇の場所へ戻るができる特権を与えられている。主のみこころに歩む中で、失敗し、落ち込み、どうして？と悲嘆にくれることがある。しかし、主はいつでも私たちが以前に築いた祭壇の場所、主のもとに帰ってくることを待っておられる。私たちはそこで再び主に出会い、主によっていやされ、聖められ、強められ、みこころを再確認し、主と共に再び歩み出すことができる。これは日々の働きにおいても、子育てにおいても、伝道においても、宣教においても同じ。私たちは、常に主のもとから出て行く。私たちは困難の時に、まず主のみこころと求めて祈りたい。そして、間違いを犯した時には真実な主に目を向けたい。主はご自身の約束を必ず成し遂げてくださるお方。道に迷い、落ち込み、悲しみに暮れる時には、恐れずに以前に築いた祭壇、主のもとに立ち返りたい。主は、私たちがいやし、聖め、再び立ち上がることができるよう導いてくださるお方。この新しい週も、真実な主に信頼し、主とともに歩み出していきたい。